



【つきなみ講座】

休館中もつきなみ講座は開催いたします!ただし、会場は福岡市美術館ではありませんのでご注意ください。事前申込不要、参加無料です。受付は開始時刻の30分前からです。

7月15日(土) 15:00-
絵画と陶磁器
木下奎太郎による美術批評

明治大正期に活動した詩人・批評家の木下奎太郎(1885-1945)は、油彩画や陶磁器など、異文化の交差によって生み出された同時代の作品に注目し、縦横に論じました。彼の美術批評に導かれ、大正期に現れた新しいタイプの作品について考えてみたいと思います。

吉田暁子(当館学芸員)
場所:福岡市博物館講座2 定員:30名

8月19日(土) 15:00-
こども☆ひかりプロジェクト
〜ミュージアムがゆるやかに連携しながら地域をつくる

東日本大震災をきっかけに始まった異種館連携プロジェクト「こども☆ひかりプロジェクト」。そのユニークな活動を紹介します。

鬼木佳代子(当館学芸員)
場所:福岡市博物館講座2 定員:30名

9月16日(土) 15:00-
わたたくし展覧会学
—学芸員のあたまの中身、教えます—

30年以上にわたって携わってきた展覧会を、データ・デザイン・オリジナル・エンタメなどさまざまな視点や課題から振り返り、学芸員のあたまの中身をさらけ出します。

中山善一朗(当館副館長)
場所:福岡市博物館講座2 定員:30名

所蔵品紹介

伝・黒田齊清筆 鷺鳥図

江戸時代・19世紀 福岡市美術館(黒田資料)

縦80.0cm近い画面いっぱいに描かれた鷺鳥図。黒田家に数多く伝わる鳥をモチーフとした絵画作品の中でも一際異彩を放つ存在です。というのも、鳥を描いた作品は、そのほとんどに武勇や吉祥といった象徴的意味合いが込められており、それゆえに大名道具に相応しい画題とみなされてきたからです。一方、鷺鳥以外のモチーフの一切が

排された本図からそのような象徴的意味合いを導き出すことは難しく、余白に記された『本章綱目啓蒙』(江戸後期に著された研究書)からの引用文などは、寧ろ、こうした解釈を拒絶しているようでもあります。元々、観賞目的で制作されたのではなく、図鑑などの一部であったかもしれません。本図には、作者名を示す署名の類はありませんが、福岡藩10代藩主黒田齊清(1795-1851)の手によるものといわれてきました。齊清は幼少期より鳥を愛し、また、研究に情熱を注いだことで知られます。本図に見える、震えるような弱々しい輪郭線は、お世辞にも間違えなものとはいえません。ですが、執拗に描き込まれた羽毛や、脚部のうるこや水かきの細かな描き分けなどからは、対象の質感をなんとか再現しようという作者の強い熱意を感じることができます。

齊清は、古来、東洋画で重んじられた対象を生きた生きた「写生」にかかわって、研究者の目線から対象を客観的に描写する「写実」の精神でこの鷺鳥図を描こうとしたのではないかと、つついそんな想像をしてみたくもなるような作品です。

(宮田太樹)

もうすぐ夏休み！こども美術館2017
美術と科学を楽しむスペシャルな1日！

夏休み前の週末に、親子で楽しめるさまざまなワークショップを、東区千早の「なみきスクエア」にて開催します。今回は、福岡市美術館と福岡市科学館(平成29年10月オープン)が初めてコラボレーションして行う特別なワークショップもあります。ぜひ親子で遊びにきてくださいな。

日時:7月8日(土) 10:30-15:00
場所:なみきスクエア1階「ひまわりひろば」
(福岡市東区千早4丁目21-45)
対象:未就学児〜小学生とその保護者
協力:福岡市科学館

美術館×科学館 スペシャルワークショップ
布のヒミツ

布がどんなふうにできているのか、科学と美術の力でヒミツをときあかそう!オリジナルの布もつくります。

時間:1回目 11:00-11:45 / 2回目 13:30-14:15
定員:各回20名
対象:小学生以上
参加希望多数の場合は先着順
それぞれ15分前に整理券を配布します。

作品はどこへ？

福岡市美術館の所蔵品が下記の展覧会、美術館・博物館でご覧になれます。

「夢の美術館—めぐるあう名画たち—」

福岡市美術館、北九州市立美術館収蔵の名品展。当館からは近現代美術の名品を約40点出品しています。

◎久留米美術館／6月30日(土)—7月16日(日)

◎宮崎県立美術館／7月22日(土)—9月3日(日)

◎島根県立美術館／9月12日(火)—10月23日(月)

九州国立博物館

九州国立博物館の文化交流展示室で開催中のテーマ展示「描かれた名場面—文学と絵画」では、《伊勢物語図 色紙 第六十七段 花の林》を含む当館所蔵品3点が、「青銅器のひろがり」(7月19日—)では、《王字形水瓶》を含む当館所蔵品7点が展示公開されています。

⇒「描かれた名場面—文学と絵画」

7月4日(火)—7月30日(日) 文化交流展示室 第11室

⇒「青銅器のひろがり」

7月19日(水)—11月26日(日) 文化交流展示室 第3室

王字形水瓶
奈良時代 8世紀
松本コレクション

〈ただいま修復中〉

ご紹介するのは当館所蔵作品の草間彌生《南瓜》。この作品は、福岡市美術館が収蔵した1995年から2016年8月31日のクロージング最終日まで、エスプラナードにおいて皆さんに長くご覧いただいております。美術品を屋外へ恒久的に設置するということは、光や温度湿度変動、気中化学物質など、外気の影響を直接受け続けるというリスクがあります。本作品も長年の展示によって剥落や亀裂が目立ってきたため、今回の休館を機に修復処置を行うことを決定しました。作品を修復するにはまずは修復現場へ輸送をしなければなりません。作業員さんによって作品保護のため全面まるごと梱包された姿は、まさに出荷前の南瓜のようでした。そして、現場に引き渡し、しばしのお別れ。現在修復中の南瓜ですが、修復が終わり次第、近々皆さんのお目にかかることがあるかも???その時はピカピカの状態で再会しましょう! (渡抜由季)

〈ふくおか応援寄付〉

福岡市へのふるさと納税(ふくおか応援寄付)で、寄付金の使い道が選べることをご存知でしょうか?ふるさと納税では、一定の上限のもと、寄付額から2,000円を差し引いた額について、所得税や住民税から控除されます。平成28年度(平成29年3月末まで)は福岡市美術館に対し、9名の方から計9,113,000円のご寄付をいただきました。本当にありがとうございます。現在、いただいた寄付金を活用して、新たな所蔵品を購入する準備が進んでいます。平成29年度も募集が開始されています。美術館に5,000円以上ご寄付いただいた方には、記録集『福岡市美術館 クロージング/リニューアルプロジェクト2016 について語る。』を贈呈いたします。みなさまからの応援をお待ちしています!

問合せ:リニューアル事業課 Tel 092-714-6051

ふくおか応援寄付 検索

【編集後記】

○福岡市美術館のリニューアルはPFIという手法を取り、美術館の横こはそのままだ、民間事業者であるわたしたちがパートナーとなって事業を進めています。改修工事いよいよ着工。そして今号からエスプラナードの編集もわたしたちが担当すること!次号もご期待ください!(西日本新聞社・笠井)○今号から編集を担当することになりました浅野です。美術館の外のスタッフが作った初「ESPLANADE」、いかがでしたか?今回のテーマは「ボランティア」。始まりはシンプルな動機でも、実際に行動するといろんな出来事や感情が交錯して、とても豊かな経緯になると感じます。こういうアートの関わり方もステキですよな。(浅野)

福岡市博物館

福岡市美術館・福岡市博物館の黒田資料をあわせて紹介する「市美×市博 黒田資料名品展」と題したシリーズの展覧会を開催中です。今回のテーマは「黒田家の博物学」。学問好きとして有名な10代藩主黒田齊清・11代藩主黒田長濤を中心に黒田藩主による研究活動を伝える資料を展示します。本号でご紹介している《鷺鳥図》も公開中、是非足を運んで下さい!

⇒「市美×市博 黒田資料名品展 II 黒田家の博物学」
6月27日(火)—8月27日(日) 企画展示室2

「生誕140年 吉田博展」

明治、大正、昭和にかけて風景画の第一人者として活躍した吉田博(1876-1950)の回顧展。当館所蔵作品17点を展示しています。

◎損保ジャパン日本興亜美術館／7月8日(土)—8月27日(日)

福岡アジア美術館

アジアギャラリーにて、当館所蔵のアニッシュ・カプア《虚ろなる母》とザオ・ウーキー《僕はまだ二人だ—10.3.74》を展示しています。こちら是非ご覧ください!

ESPLANADE 188

福岡市美術館 季刊誌 エスプラナード 188号 July, 2017



福岡市美術館のボランティアたち

福岡市美術館には、現在約140名のボランティアが所属し、4つのグループに分かれて活動しています。どんな活動をしているのか?どんな人たちが活動しているのか?など、実際の現場を紹介します。

さっそくボランティアスタッフの先導を受けて、最初に鑑賞する作品は、博物館の正面に設置された、大きな4体のブロンズ像です。エミール・アントワヌ・ブールデルというフランス近代彫刻の巨匠の手による作品だそう。「自由、勝利、力、雄弁の4つの意味を表しますが、それぞれどれか分かりませんか?」はたしてこれ1体でどのくらいの重さがあると思いますか?ボランティアスタッフから参加者に質問が投げかけられます。答えるためには、自然と作品をよく見ることになります。「では次に移動します!みなさん、これは『美Walk』ですから、有酸素運動になるように早歩きで進んでください」。なるほど、ツアーの意味合いがわかってきました。今日のコースとなっている福岡市の百道浜エリアは、広場や公園に多くのパブリックアートが設置されている場所なのだそう。これまでに何度も通ったことがあるにも関わらず、作品に全く気がついていなかったことに驚きます。



一度気がつくと、まるで「美術の眼」を得たように、次々に作品が見えてくるのも不思議。申明銀(Poodle)やニキド・サンファール《大きな愛の鳥》を鑑賞して、またまた早歩きで、福岡市出身でサグラダ・ファミリアの主任彫刻家としても知られる外尾悦郎の《松の実》へ到着。大きな松ぼっくりがわたしたちを待ち受けます。ここではモチーフの持つ意味について、特別にアーティスト本人が応えたメッセージが披露されました。「固い団結の象徴であると同時に、中の白い胚は高い栄養価があり、繁栄の象徴でもある。また自然の美しさを端的に表現する形でもある。ちなみにグワディはいつも松の実を持ち歩いていた」というエピソードを聞くと、急に作品との距離が近づいた気がしました。最後に、福岡市美術館にも作品が所蔵されている、バリー・フラナガンの《ミラー・ニジンスキー》を鑑賞。今回のツアーの行程は、約3キロ。心地よく疲れ

てゴールすると、そこにはケールやリンゴなどで作られた特製美ドリンクが!今日観た作品のことを話し合う、いい時間を持つことができました。実は今回のツアーは、本番前に、実際の行程を3度もシミュレーションしながら回ったのだそう。作品のセレクトは的確か?短い時間で作品のどの部分を紹介するか?自分が担当する作品の勉強は十分か?ウォーキングの時間を含めて予定通りに進行できるか?考えることや準備することがたくさんあったそうです。「街の風景の中に溶け込んでいるアートの存在に気づいてほしくて企画しました!」一方向的に説明するのではなく、参加してもらいやすい仕組みを考えたて「アートを観て、自分もキレイになる。美術鑑賞のハードルを下げられたらうれしい」と、今回のツアーの意義を語るボランティアスタッフたち。普段のガイドの手法を、美術館を飛び出して実践した、有意義な時間でした。

INTERVIEW
1

わたしは 「ギャラリーガイドボランティア」です。

——主な活動内容は？

学生を対象としたスクールツアーや、希望者に対して、美術館の作品を紹介するボランティアです。展示中の作品から3点ほどピックアップして、30～40分くらいのツアーを組み立て、館内を回ってガイドをします。

※現在は閉館中のためギャラリーツアーはお休み中

——活動に携わる上で心がけていることは？

福岡市美術館では、作品の解説をするのではなく、参加者から作品への質問を引き出す手法で、ボランティアガイドの活動を行っています。この方法でのガイドは、自由に作品を観ることを促しますが、一方でどんな質問が飛び出すか予測できないのと同時に、臨機応変にライブで対応する力も求められます。

また、共通する作家の出身地で選んだり、同時代性を色濃く感じるものを選んだり、作品のセレクトも、腕の見せ所です。

——この活動の醍醐味は？

ボランティアを始めた動機は、もっと美術の勉強をしたいというものでしたが、実は参加者とのコミュニケーションがとても大切なのだと気が付きました。作品の豊かさに気づくことができるという意味で、ガイドとは決して一方通行のものではないのだと感じます。

——活動にまつわるエピソードを教えてください

やはり子どもたちをガイドするのは楽しいものです。国語や算数などの教科が苦手な子どもが、ユニークな見方を発表して、うれしそうに自信を持った表情をしているのを見ると、勉強だけでは測れない子どもの能力を垣間見たような気持ちになることがあります。わたしたちボランティアは、日々いろんな方にガイドをしています。子どもたちにとってはこの30分の体験が、とても大切な時間になり得るのでは？と気づいた時、やりがいと同時に責任も感じました。

INTERVIEW
2

わたしは 「美術家情報整理ボランティア」です。

——主な活動内容は？

美術館には、全国の様々な美術館やギャラリーから、展示のお知らせが届きます。その展示案内から、作家の名前・会場名・展覧会名・会期などをパソコンに入力し、データ化するのが仕事です。

——活動に携わる上で心がけていることは？

他のボランティア活動に比べて、比較的新しい2004年にできたグループです。いま2万件弱の情報が入力済み。パソコンでの入力作業そのものは、慣れれば難しいものではないので、間違いがなく、効率のよい作業方法を考えることが大切です。

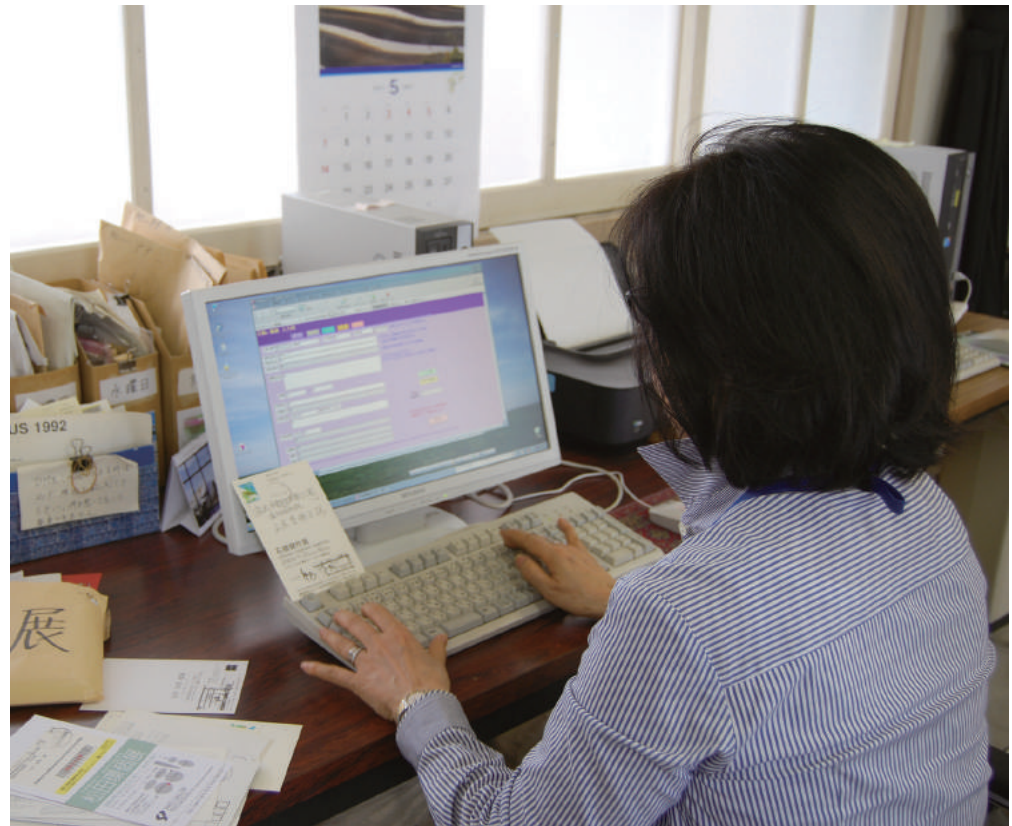
——この活動の醍醐味は？

とにかくコツコツと入力していく地味な作業。やっていることの意味がよく分からなくなって、やめたくなったことがあります。けれど、「特に現代の作家の展示を行う場合に、過去にどこでどんな展覧会をしていたかというのをすぐに検索できるのは、とても役に立つ」と学芸員さんに言われ、なるほど、縁

の下の力持ちとして、こうして力になれるんだなと思いました。現在は福岡市美術館だけで完結しているデータですが、将来的には全国的美術館網をつないで、ビッグデータとして活躍する時が来るに違いない！と、まだ見ぬ未来を想像して続けることにしました。

——活動にまつわるエピソードを教えてください

ファイルメーカーというソフトを使っていますが、これまで、情報の整理がしやすいように、郵便番号検索ができるようにしたり、過去の入力とダブっていないかを参照できるようにしたりと入力画面を改善してきました。これでずいぶん入力の精度があがりました。学芸員さんと相談しながら、実際に作業をする現場の意見をかなり取り入れていただいていると思います。こういう工夫ができるのはやりがいがあります。

福岡市美術館
鬼本佳代子学芸員に聞くINTERVIEW
3

わたしは 「新聞情報ボランティア」です。

——主な活動内容は？

新聞各紙にくまなく眼を通し、掲載されている美術館関係、展示関係の記事や広告、作家が亡くなった記事を切り抜きます。そして月別、新聞別にファイリングするのが仕事です。

——活動に携わる上で心がけていることは？

作業の必需品は「赤鉛筆」「はさみ」「のり」と「台紙」です。まず「これは必要そうだ」と思った記事を、赤鉛筆で囲みます。どの記事をピックアップするか？というのは、一人だけでは偏りが出る恐れがあるので、複数の人の眼を通すことになっています。そして切り抜く記事が決まったら、刃の長いはさみで切り抜き、いつの記事かが分かるようにして台紙に貼り込んでいきます。どの記事が必要かを判断するには、やはり美術に対する関心や知識が必要です。普段からその手の情報を気にかけています。

——この活動の醍醐味は？

もともと美術が好きではあったけれど、専門的な知識があるわけではありませんでした。しかし「いつか社会に貢献できた」という気持ちで始めました。ボランティアとして採用される前に、しっかりした講習を受けて、レポートも提出。自分たちもささやかながら、美術館の一端として役に立つことができるのは、うれしいことです。最初のうちは、手順の意味合いが分からないこともありましたが、やっていくうちに、「なるほど、このやり方になり着くまでにいろんな試行錯誤があったんだ」と納得。30年以上のノウハウの蓄積があるのを、肌で感じるようになりました。

——活動にまつわるエピソードを教えてください

福岡市美術館には仙厓和尚の画が多く所蔵されています。以前、画についての話題ではなかったのですが、仙厓の人となりにについての記事を切り抜いていました。すると、その記事が、仙厓の作品を展示する時に活用されたのです。それはすごくうれしい出来事でした。

INTERVIEW
4

わたしは 「図書整理ボランティア」です。

——主な活動内容は？

図書整理の活動は多岐にわたっていて、蔵書整理や索引カードづくり、本のカバーかけなど、本や図録などの整理に関わることもなんでも係です。

——活動に携わる上で心がけていることは？

とにかくコツコツと丁寧に作業することでしょうか？実はそんなに繊細な作業に自分が向いているとは思っていないんですけど、やっているうちにできるようになってきた、という感じです。最初は、「大好きな美術の本が見られる！」という下心もあって参加。もちろん見せていただくこともできるんだけど、思った以上にやることはたくさんあって、仕事に追われています。貴重な資料も多いので、とにかくわかりやすく整理整頓して、欲しい情報にできるだけ早くとり着けるようにするのが、大事なことです。

——この活動の醍醐味は？

図書整理に限らない話ですが、他のボランティア

さんたちも、みんな美術が好きで集まってきた人ばかり。職業や立場に関係なく、純粋に好きなことのために集まってきた人たちなので、話しても楽しいし、人間関係が広がります。

——活動にまつわるエピソードを教えてください

ある程度の年齢になったら、社会から受けてきた恩を返す意味で、社会奉仕をしたいと、長年考えてきました。いろいろなボランティアがある中で、絵を描くことが好きだったこともあり、美術館を選びました。以来、30年以上毎週1回の活動を続けてきました。もちろん奉仕ですから、周りの人には「どうしてそんなことをしているの？」と言われたことも。わたし自身はきりきりした答えがなかったのですが、最近では「人様のためと思っていただけたら、結果的に自分のためだったな」と思うようになりました。役に立てる場所があるということは、本当にありがたいことです。

INTERVIEW
5

美術館とボランティアの幸せな関係とは？

美術館のボランティア活動で起きていること

わたしは普段、ボランティア全体のとりまとめとギャラリーガイドボランティアを担当しています。福岡市美術館のガイドツアーは「対話型鑑賞法」という手法をとっていて、一方的な解説ではなく、ボランティアは来館者が自分の眼で作品を見る手伝いをします。これは実はかなり難しく、どんな意見も受け入れつつ、発展性がある部分を見極めてピックアップする力や、反応を見ながら話し方を変える技術が求められます。そのためには、作品のことをよく理解していないといけませんし、もちろん目の前の来館者と真摯に向き合う必要もあります。ボランティアのみなさんには、かなり高い要求をしていると思います。

学校団体をガイドする機会も多く、実際の様子を見てみると、子どもたちは親でも先生でもない大人と出会い、「こういう作品じゃないか？」「こういうふうにも見える」と話し合うことで、自分の世界を広げていているんだなと感じることがあります。そしてこの作用は、実は一方的なものではなく、ボランティア自身の世界を拡大することにもつながっています。この体験は、多くのボランティアに「人のためにしている行為が、自分に影響を及ぼしていた」と感じさせているようです。もちろんそれは、ギャラリーガイドボランティアだけではなく、新聞情報や図書整理、美術家情報整理ボランティアという資料整理系の活動は、美術館の持つ大きな機能のひとつである「アーカイブ化」に深くコミットします。資料を整理しているとき、現代のわたしたちが見ている資料が、100年前の人々が残してくれた

ものであるかもしれないと気づきます。そして、いまストックしている情報は、100年後に役に立つかもしれないわけです。美術を通じて、過去はもちろん、未来への時間の連なりを感じることも、美術館に関わる魅力のひとつだと思います。

福岡市美術館のボランティアになるには

福岡市美術館では、ボランティア活動の目的をこのように表現しています。

- ①美術館および美術館利用者の活動を支援すること。
- ②美術館での経験をもとに、地域の文化活動に貢献すること。
- ③ボランティア活動を通して自ら学び、成長する喜びを知ること。
- ④だけでなく、②や③のようなことも目的としているの

は、福岡市美術館が、単に作業をお願いする対象としてボランティアを見ているわけではないということです。また、登録前にはかなりみっちり研修を行うことにしています。5年に一度募集をかけ、希望者はまず10回の講義を受けていただきます。ここで博物館学や美術史など一般的な内容や、福岡市美術館のコレクションについて学びます。その後、次は希望する作業に合わせて、担当の学芸員がついて専門的なグループ研修が行われます。そこまで修了して初めて、ボランティアデビューとなるのです。ボランティアいわく「ここまで勉強するの？」と驚くそうですが、これを経験することで、自分が美術の一端に関わるのだという覚悟が生まれたという人も多くいます。それから、20年近くボランティア活動をしていると、自分自身のやりがい満足させるだけでなく、人の喜びを自分の喜びと感じることができるような人が長続きしているなと思います。

なんのためにボランティアをするのか？

ボランティアにはさまざまな立場の方がいらっしゃいます。活動になにを求めているかもいろいろのはずです。当館では、仕事や年齢、個人的な背景はあえて聞かずに、フラットに接するようにしています。さまざまな立場の人が同じ活動ができるというのも、ボランティアの魅力のひとつだと思うのです。また、長く続けていただくのはもちろんうれしいのですが、必ず続けなければならないことだというふうにも思っています。人の気持ちや環境は、その時々で変化するものです。「ボランティア＝自らの意志で参加すること」ですから、やめたい時にはやめてもいいのです。福岡市美術館のボランティアの歴史は、閉館前の1976年にまで遡ります。日本初の公立美術館のボランティア誕生が、北九州市立美術館の1974年ですか

ら、日本でもかなり早い段階から始まっています。それからの長い期間、決して順風満帆だったわけではありません。活動の意義がきちんと伝わらず、うまく稼働していない時期もありましたし、観光バスの来館が取りやめになり、ギャラリーガイドの存続が危ぶまれたことも。その度ごとに「なぜボランティアが必要なのか？」「どう運用していくべきか？」を、美術館スタッフとボランティアのみなさんで模索しながらやってきました。現在、いろいろな美術館を見渡すと、新たなボランティアの形が生まれています。福岡市美術館のボランティアの形も、これから先、変化していくかもしれません。大切なのは、美術館側が、ボランティアのみなさんがどうしたいかを敏感にとらえつつ、社会の動きをどう取り込んでいくのか？ということ。つまり、美術館が社会とどう関わっていくつもりなのかという姿勢が、ボランティア活動にははっきり表れているのだと思います。